

# 応用力と学びの意欲にカギ

子どもの学力の「質」について考えたことがあるでしょうか。

以前、子どもの学力低下が社会的な話題となり、「ゆとり教育」に対する批判が強まりました。その結果、教科書の内容や授業時数を増やすよう指導要領の改訂が行われました。

「学力」という言葉は日本独特のもので、その輪郭はあまり明確ではありません。計算が早く正確にできること、漢字を正しく読み書きできること、自然や社会に関する知識を持っていることなど、例はいくらでもあげられるのですが、その全体像となるとだいぶあやふやです。

音楽や美術などにおいて学力とはあまり言いませんから、主にテストによって

## 学力の質



## はぐくむ

計測可能な教科における知識や技能として考えられているわけです。

学力についてはテスト結果のよしあしと問われる一方、その質について議論になることはあまり無いように感じます。

体重とともに体脂肪率を気にするのと同じように、学力はその質についても考えなくてはいけない時代に来ていると思います。

例えば、現在行われている学力テストの結果から、知識の活用に関する力に課題があるとされています。基本的な読み書き計算の力は備わっているものの、それを応用して日常生活や実社会に活用することが苦手な子どもが多いようです。

日常の授業が基本的な技能を身につけることに重きをおいて展開されていること

が、その背景にあるのではないのでしょうか。

野球部の練習にたとえれば、ひたすら筋力トレーニングを繰り返してはいるけれど、ゲームを通じた実践的な練習が不足しているということと同じではないかと思うのです。目まぐるしく変化する社会に柔軟に対応する力が求められる今、学びの質の転換が求められています。

もう一つ、考えなくてはならない問題があります。日本の子どもたちの学習動機の希薄さです。学んだことが将来役に立つと感じている割合、自分からもっと調べてみたいと思うという回答の比率が、先進諸国の中で最低ランクだということはあまり知られていません。

学習意欲を学力に含むのかという疑問はありますが、学ぶ内容や方法の問題がそこに表れているように思うのです。